

サトイモ疫病を防ぐために

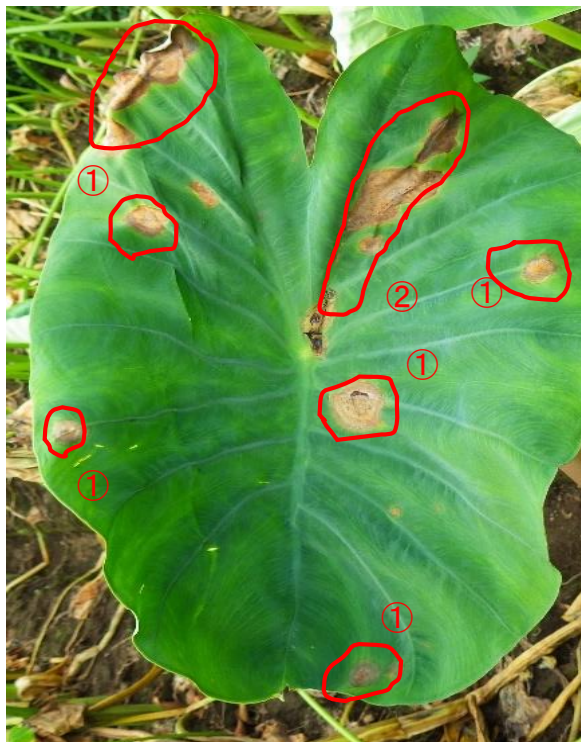
～来年の作付に向けて～

令和2年11月11日
さいたま農林振興センター

昨年に引き続き、今年も県内でサトイモ疫病の発生が確認されました。本病は、西日本を中心に発生が拡大していて、大きな問題となっています。来年の発生を抑制するため、**秋冬から植付時に対策を行いましょう。**

【サトイモ疫病とは何か】

卵菌類に分類される疫病菌が引き起こす病害です。キュウリベと病菌や、苗立枯病のピシウム菌と近い仲間です。昔から知られていた病害ですが、海外の報告にある激しい症状（広範囲での収量低下）は、日本では平成26年ごろから確認されています。また、八つ頭にも発病します。



- ①病斑は円形に広がる
- ②病勢が進むと穴が開く場合がある
- ③葉の表面だけでなく、裏面にも病斑ができる
- ④葉柄部にも黒いしみ状の病斑ができる場合がある



対策1 残さや野良生えのイモを放置しない

疫病は、**植物体と一緒に越冬する**と考えられています。定期的にロータリーをかけて、残さを分解させましょう。菌は発生源から数百メートルはすぐ拡散するので、栽培予定地から離れていても残さを放置するのは危険です。

野良生えのイモは、除草剤で枯らすのも有効です。除草剤の種類によっては、地下部が生き残って再生することがあるので、その場合は再度の処理が必要です。



種いも畑に残さを放置してはいけない

残さを破碎し、堆肥の微生物で分解する。残さ分解用の微生物資材を活用しても良い。



ロータリーで破碎し、堆肥で分解する

本資料（裏表とも）は、令和2年2月サトイモ産地を救う研究開発コンソーシアム発行「サトイモ疫病対策マニュアル（2020年版）」を参考として作成しました。

対策2 種イモの選別・洗浄・消毒を行う

疫病菌は、**イモ本体や、表面に付着している土から検出**されています。また、ひどく傷んだ種イモには病原菌が深く侵入していて、薬剤で消毒できないことがあります。

このため、まずケミクロンGで消毒した用水で種イモの表面を洗浄して土を落とし、劣化・腐敗したイモを選別して除去します。水に浮くイモは疫病とは限りませんが、病原菌に侵されている可能性が高いため使わないようにします。

洗浄した後は種イモの消毒を行います。使用できる薬剤は下記の通りです。(疫病に登録のある種イモ消毒剤はありません。)

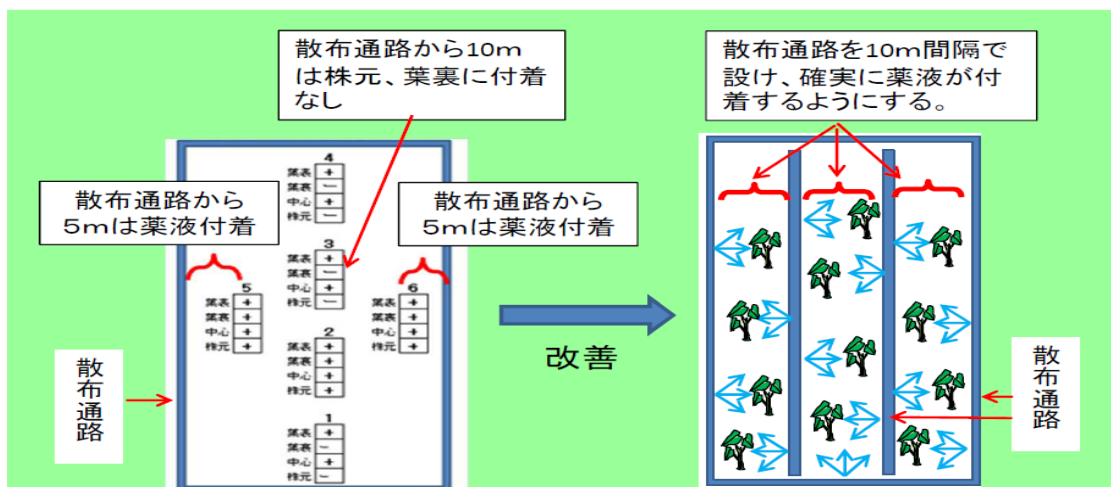


薬剤	対象病害	処理濃度	処理法
ベンレートT水和剤20	黒斑病	種いも重量の0.4~0.5%	種いも粉衣
		20倍	1分間種いも浸漬
トップジンM水和剤	黒斑病	200~500倍	20~30分間種いも浸漬

対策3 散布通路の確保

疫病用の薬剤は、**発病部位に付着しなければ防除効果はありません**。鉄砲ノズルによる周囲からの散布の場合では、10m先の株元には薬剤が付着しません。鉄砲ノズルを使うとき、5m程度の距離からの散布なら、株元まで散布薬液が付着するので、**10mおきに散布通路を確保しましょう**。

その他の散布方法をとる場合でも、薬剤がしっかり株元に届くように適宜散布用の通路を確保しましょう。



10m毎に作業管理通路を確保し、どの株にも薬剤が付着するような畝立てを行う。

サトイモ疫病に登録のある薬剤

ペンコゼブ水和剤

収穫7日前まで2回以内、希釈倍率500倍、使用液量100~300L/10a

ダイナモ顆粒水和剤

収穫21日前まで3回以内、希釈倍数2,000倍、使用液量100~300L/10a

アミスター20フロアブル

収穫14日前まで3回以内、希釈倍数2,000倍、使用液量100~300L/10a

※スカッシュ、アプローチBI、ハイテンパワー等の展着剤を必ず使用してください

【農薬について】登録情報の確認年月日：2020年11月11日

農薬を使用する際は、必ず農薬のラベル表示確認しましょう。

農薬の飛散防止に努めましょう。農薬の使用記録簿をつけましょう。

さといもの病斑や防除対策について、疑問点があればご相談ください！

さいたま農林振興センター 農業支援部 ☎048-822-1007